

久留米城下町遺跡

(旧呉服町)

— 第24次発掘調査報告 —

平成27(2015)年3月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、久留米城の城下町として、小早川氏、田中氏を経て有馬氏によって統治され、北筑後の政治と経済の中心として発展しました。このため市内には、先人達の残した多くの文化遺産が存在します。

今回の調査では、江戸時代に低湿地を埋め立てて築かれた堅固な土蔵の基礎を検出し、当時久留米城下の中心地としてにぎわった当地の様相を確認することができました。この成果を活かして、今後の久留米市の市民文化や教育の発展に貢献できることを願っております。

また、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました地権者ならびに周辺住民の皆様に心より御礼申し上げます。

平成27年 3月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち、平成26年度にシーユーホーム株式会社代表取締役古賀清秀氏の委託を受けて実施した、久留米城下町遺跡第24次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭と石橋栄治、山口誠也が行い、浄書は「遺構くん cubic」で作成した。遺物観察表は古賀和子が作成した。
3. 遺構写真は、マミヤ RB67を用いて江頭が撮影した。遺物写真撮影はニコンデジタルカメラ D700を用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、江頭が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、S D－溝、S K－土坑、S X－石垣、埋甕、その他の遺構を示す。
6. 出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
7. 本調査の略記号はL K M－024、調査番号は201407である。
8. 本書の執筆・編集は江頭が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	15

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、社屋建設に伴う事前の発掘調査である。平成26年5月13日、シーユーホーム株式会社代表取締役古賀清秀氏より、久留米市中央町32-4、32-5、32-6、32-7における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である久留米城下町遺跡内にあたり、今回の調査地においても、江戸時代の遺構が残存している可能性があると考えられたため、即日発掘調査が必要である旨回答した。また同年6月12日依頼者より、発掘調査の依頼が提出され、それを受けて久留米市長檜原利則とシーユーホーム株式会社代表取締役古賀清秀は、同年6月23日埋蔵文化財発掘調査にかかる委託契約を締結し、久留米市教育委員会は同年7月1日より、発掘調査を開始した。同年8月12日に発掘調査を終了し、その後、平成27年3月31日まで整理作業と報告書の作成を行った。調査面積は84㎡である。

2. 調査の体制

調査委託者：シーユーホーム株式会社 代表取締役 古賀 清秀

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：久留米市市民文化部 部 長：野田 秀樹

次 長：竹村 政高

文化財保護課 課 長：園井 正隆

課長補佐：宮崎 俊一

課長補佐兼課主査：白木 守

事務主査：塚本 映子

庶務担当：豊福 早苗

調査担当：江頭 俊介

整理担当：古賀 和子、丸山裕見子

発掘調査臨時職員

青木佐智子、石橋 英治、石橋 康子、石橋 良一、鐘江 清、溝上 国男、御手洗久直、山口 誠也、山下 洋子

発掘調査整理臨時職員

酒井 順子

3. 調査の目的と経過

調査地は江戸時代の呉服町にあたる。当該期の町屋の遺構の状況を確認することを目的として調査を行った。平成26年7月1日、重機による表土剥ぎを行った。地表直下から石垣の上端が検出された。石垣以外の部分はGL-40cmほどで江戸時代後期から近代の生活面を検出した。各遺構の調査・記録を行い、同年8月12日に発掘調査を完了した。その後平成27年3月31日までは、遺物整理と報告書作成を行った。遺構実測はトータル・ステーションで行い、「遺構くん cubic」で編集した。記録写真は、カラーリバーサル・モノクロ6×7判で撮影した。

Ⅱ．位置と環境

久留米市は、九州の北部、筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中心に位置する。古代においては筑後国府や国分寺が置かれ、筑後地区の政治・経済・文化・宗教の中心を占めた。近世には、毛利氏、田中氏の代を経て、有馬氏二十一万石の城下町として栄えた。近代は軍都として、また繊維産業とゴム産業の街として栄え、現在は県南の中核都市として発展している。

本調査地周辺は、筑後川が南西へ屈曲しながら西流する左岸に位置し、更新世の堆積物によって形成された低位段丘上に、遺跡が立地している。旧石器時代の遺構は発見されていないが、ナイフ形石器が一点報告されている（久文報328集）。弥生時代前期から中期前半にかけて低位段丘上に大規模な甕棺墓地が営まれるが、集落遺跡は未発見である。古墳時代には京隈地区に日輪寺古墳が営まれる。この古墳を造営した生活基盤となる集落も全体像は不明であり、JR久留米駅西口立体駐車場建設に伴う調査で、7世紀から8世紀の溝が検出されているのみである。

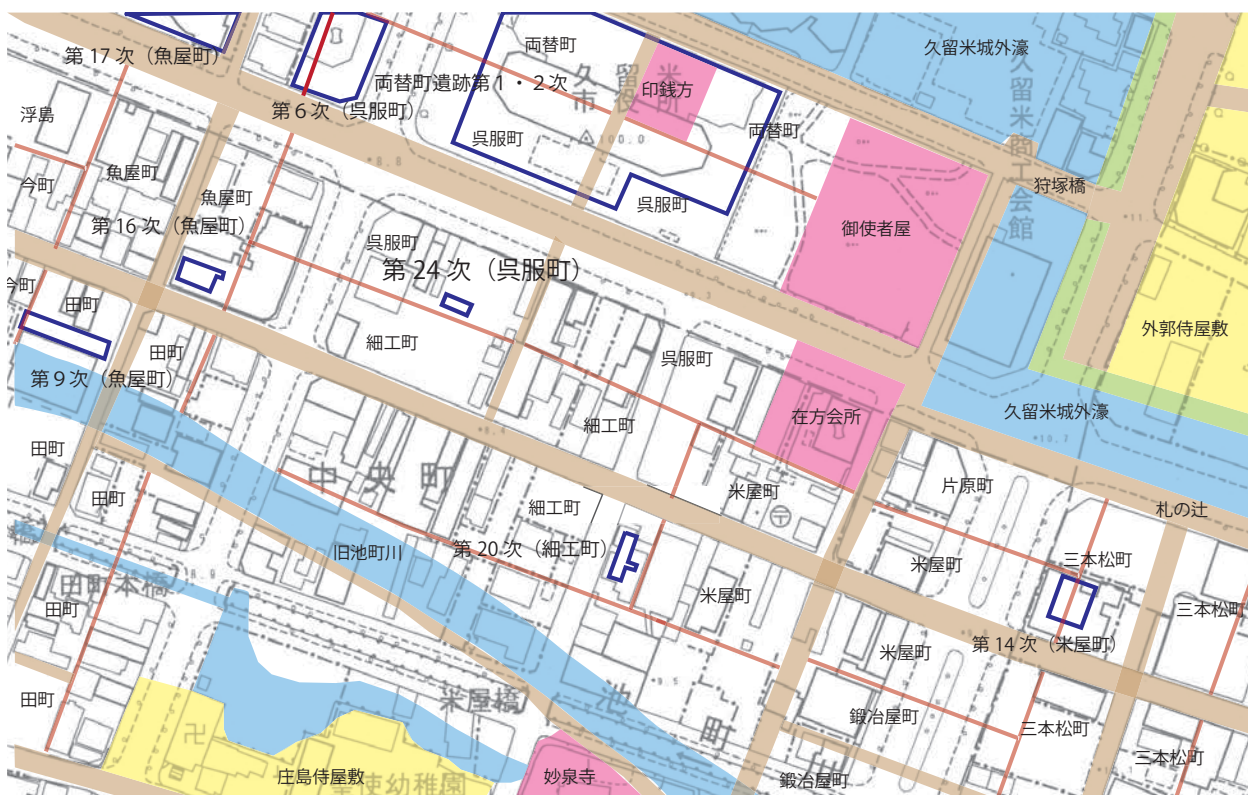
中世においては、近隣に経隈村や、西久留米村の存在がうかがえる。戦国時代の騒乱の中で、久留米城が、高良山勢力の出城として造営されたことがうかがえ、高良山座主の弟麟圭がしばらく久留米城を拠点として、天正11年（1583）ごろには龍造寺方と結んで座主良寛や大友方と対峙したとされている。秀吉の九州国割の結果、小早川秀包が関ヶ原合戦まで14年間久留米城に在城した。本調査区北側の昭和通りに隣接する両替町遺跡第1次調査（現久留米市役所敷地）では、小早川時代のキリシタン教会の建物や十字をあしらった瓦などが発見されており、調査地周辺に城下町が形成されていたことがわかる。その後関ヶ原の功績で田中吉政が筑後一国の国守として柳川城に入城すると、久留米城はその支城とされ、柳川往還や三本松町、洗切、内町、元町、長町などが整備された。このころの元町は別名を祇園町といい、のちの外郭である。長町は現在の通町であり、内町はおおよそ本調査地周辺であると思われる。

本調査地は、池町川の旧流路に沿うように、東西に谷状に延びる標高8mほどの低湿地に立地し、現在は南側に池町川が流れている。先述の市役所地中から、田中時代の堀の跡が見つかっており、この堀に沿って東西に続く町が内町である可能性がある。田中時代の城郭は、同時期に田中氏が改修した福島城や赤司城、城島城と同様に、街道と町を城内に取り込んだ総構え式の城郭と考えられる。有馬氏入封後には東向きであった城郭を南向きにしたとされていることから、おそらく柳川往還の帰着点である三本松町から西側に屈折し、そこから内町が西に延び、元町が北に延び、内町の突き当り付近に洗切（川湊の町）があったと想定されている（久文報74集）。筑前へむかう街道は、城の東側の遺称「博多道」がそれにあたり、肥前へ向かう街道は、洗切から西へ、府中へ向かう街道は長町を経て東へ抜けるようになっていたのではなかろうか。

田中家断絶後、元和7年（1621）に久留米領主となった有馬氏によって城郭の拡張や原古賀町、通り町、小頭町などの新設や拡張が行われた。本調査地は呉服町として、両替町と並んで城下の中心地としてにぎわった。



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 久留米城下町遺跡第24次調査区位置図 (1/2,500)

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

今回の調査では、近世の土蔵の基礎（石垣）1基、溝2条、明治期の石垣3列、土坑4基、タタキ1貼り、カマド1基、埋甕1基を検出した。屋敷地は、2条の溝を挟んで三つの敷地に分けられる。

土蔵の基礎

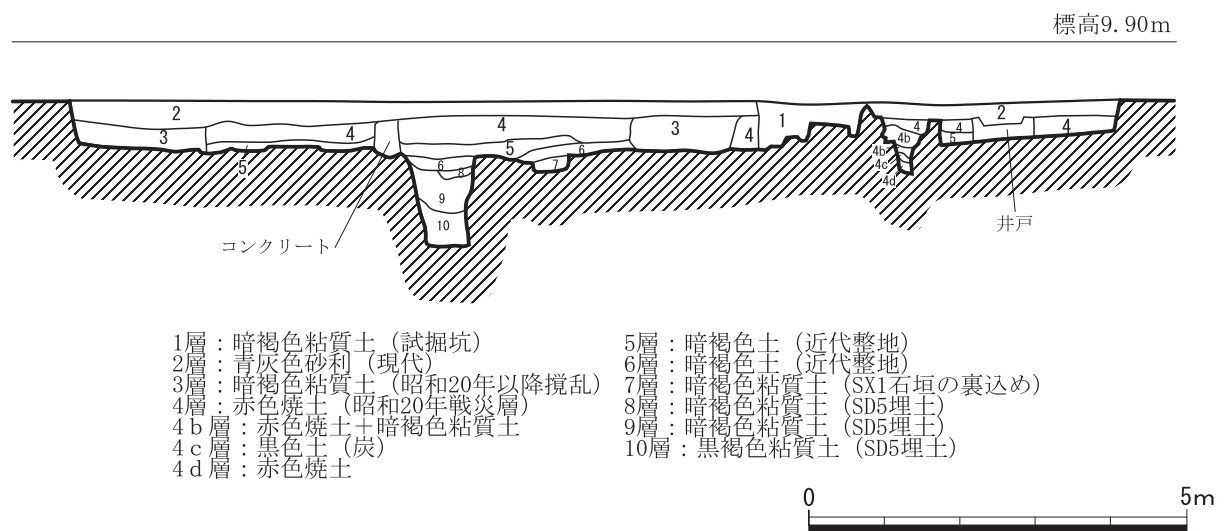
S X 2（第4図）

中央敷地で検出した西辺長5.2m以上、北辺長5.5m、東辺長5.0m以上、高さ1.3mの石垣である。片岩を小口積みに11段重ねている。裏込めから幕末ごろの陶磁器が出土している。平面形状から土蔵の基礎と考えられ、南辺が調査区外南側に存在するものと思われる。東辺断面観察の結果、石垣直下には東辺と方向を同じくして三本の松と思われる丸太材が並べられており（桐木）、石組の不同沈下を防ぐ工法が採用されていることがわかる。北辺と東辺は上段3段ほどが削平されて失われており、土蔵廃絶後に敷地が造成されたものとみられる。

石垣

S X 1（第4図）

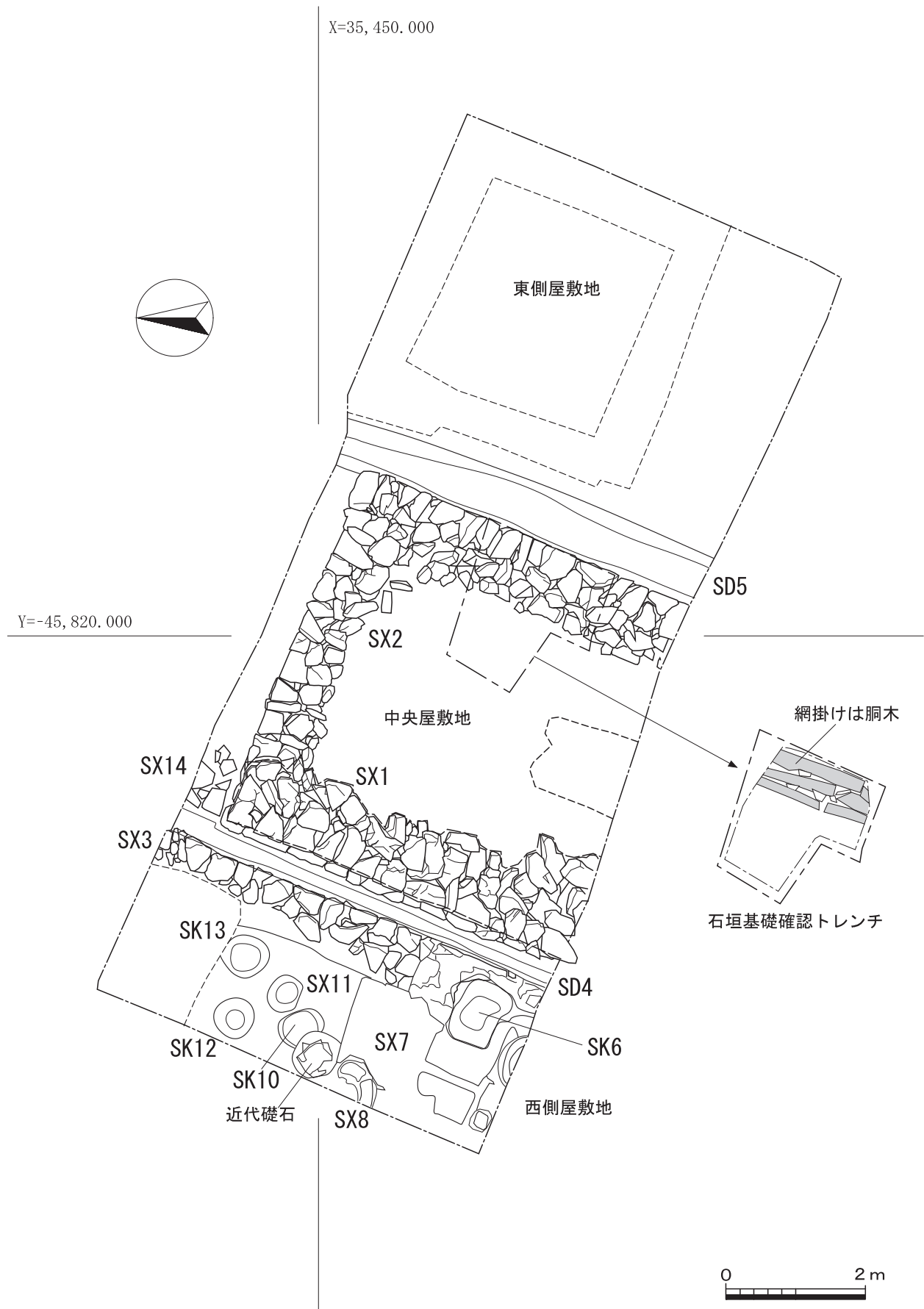
中央敷地西側で検出した長さ5.2m以上、幅1.3m、高さ0.2mの石垣である。片岩を小口積みに二段以上重ねている。石の隙間に漆喰を塗り固めており、西向かいのS X 3と共通する。S X 2より15cm東側に引いたライン揃えて並べられており、S X 2より後出するとみられる。19世紀前半に機能していたとみられる土蔵の基礎S X 2が廃絶されたのちに、中央の屋敷地の造成土の擁壁として並べられたものと考えられる。



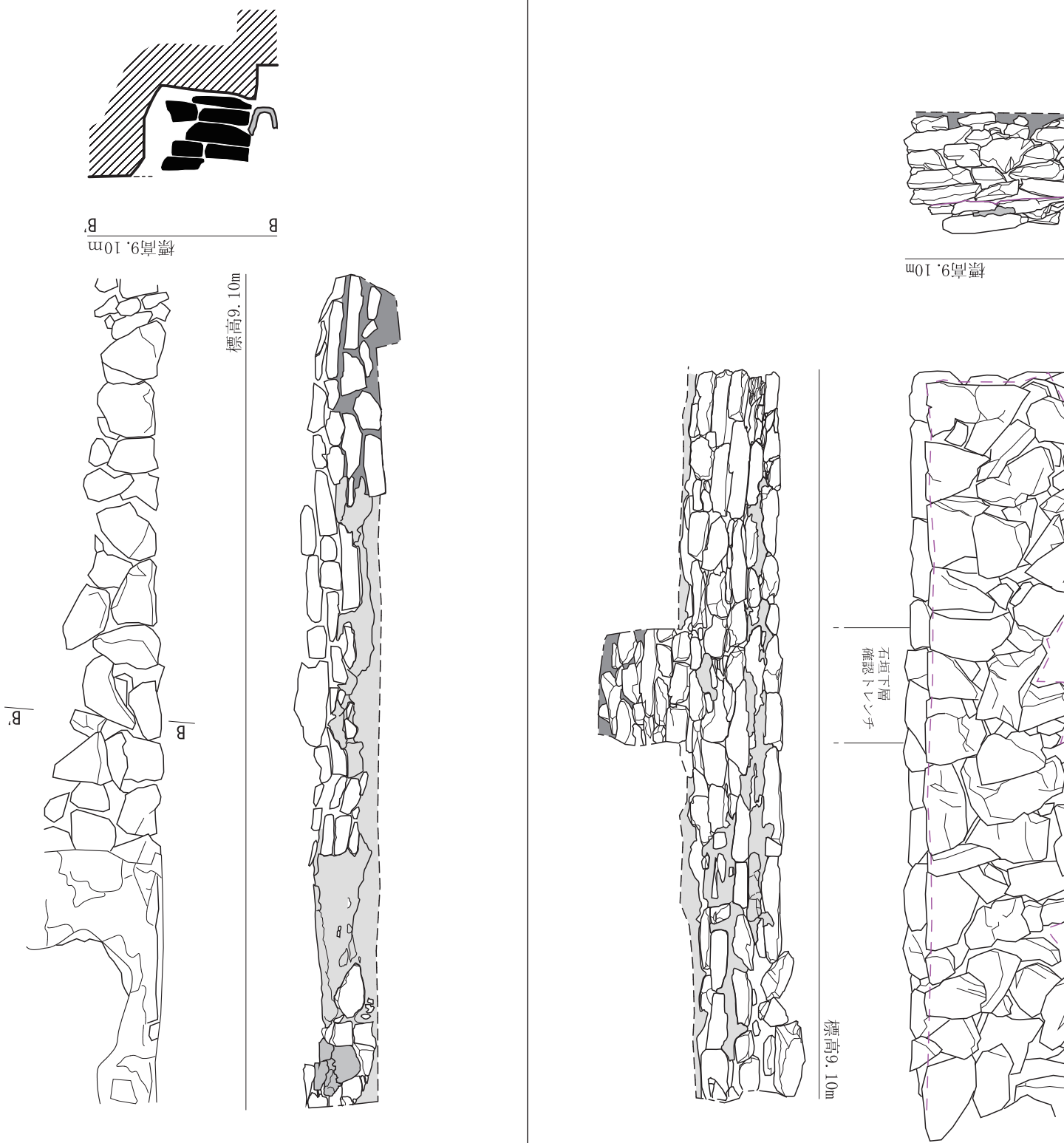
第7図 調査区南壁基本土層図（1/100）

S X 3（第4図）

西敷地東側で検出した長さ5.9m以上、幅0.8m、高さ0.6mの石垣である。片岩を小口積みに五段

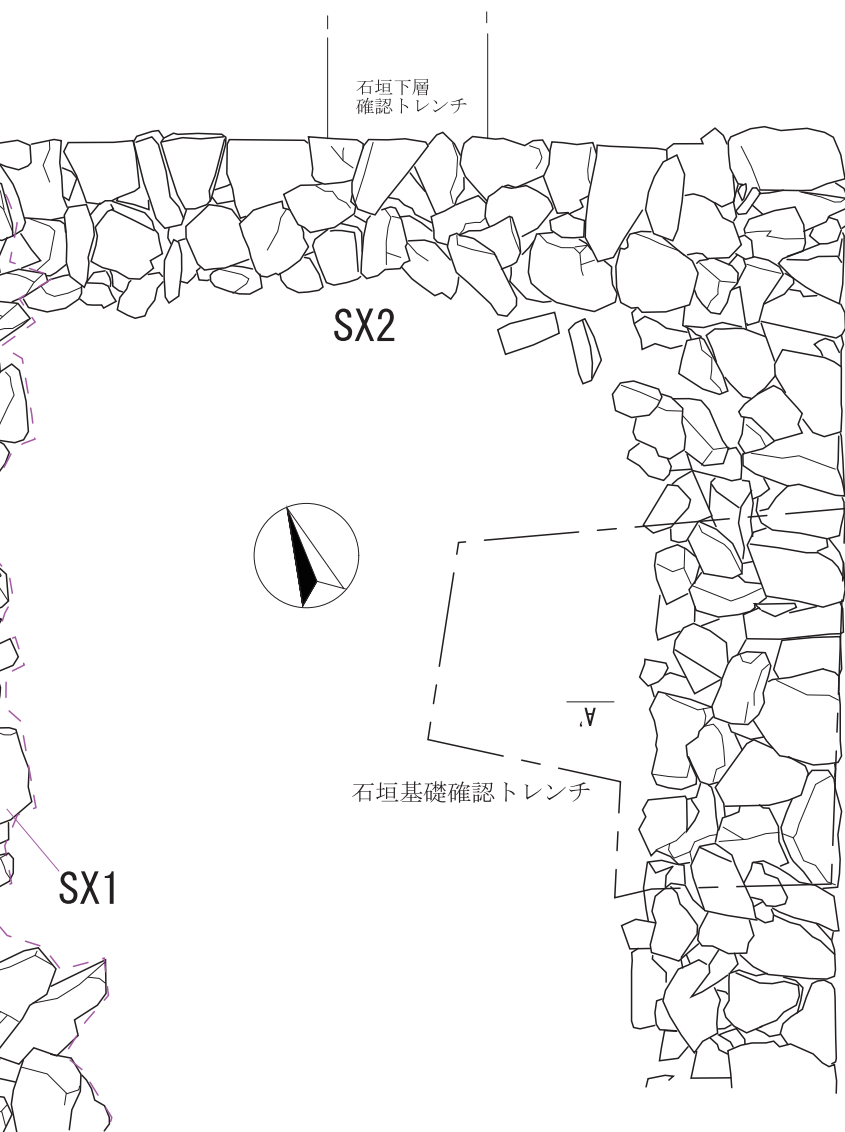
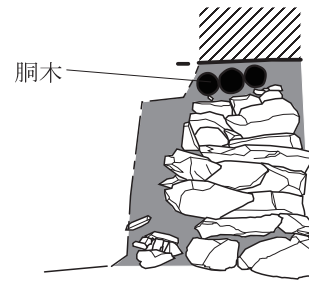
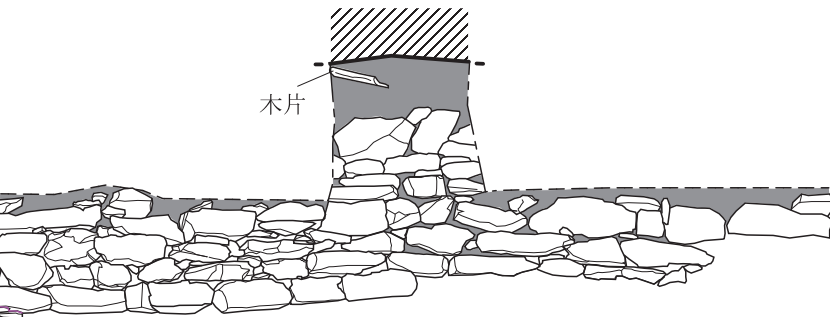


第3図 久留米城下町遺跡第24次調査遺構配置図 (1/80)



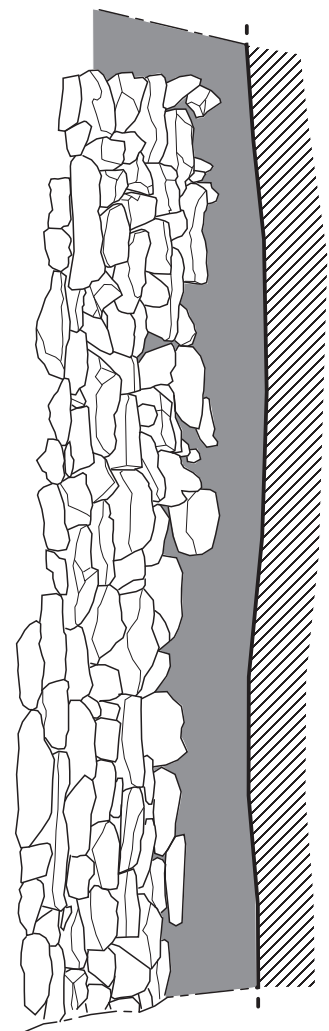
SX3

第4図 SX1・SX2・SX3実測図 (1/40)



標高9.10m

標高9.10m



※濃い網掛けは埋土、薄い網掛けは漆喰張り

SX1・SX2



重ねている。石の隙間に漆喰を塗り固めており、西向かいのS X 1と共通する。幅0.85mの掘方を伴っており、西側屋敷地の造成土の擁壁として並べられたものと考えられる。幕末から明治初頭の陶磁器を含む。

S X 14 (第4図)

中央敷地北側で検出した長さ0.5m以上、幅0.9m、高さ0.6mの石垣である。安山岩とみられる石を二段重ねている。裏込めから明治20年代以降の陶磁器が出土しており、S X 1とともに中央敷地の造成土の擁壁として機能していたものと考えられる。

溝

S D 4 (第3図)

西側敷地と中央敷地の境で検出した長さ5.9m以上、幅0.3～0.4m、深さ0.8mの溝である。底面から0.3mほど上位に砂漆喰で底面が舗装されている。砂漆喰より下層から、明治期の陶磁器が出土している。

S D 5 (第3図)

中央敷地と東側敷地の境で検出した長さ5.5m、幅0.7m、深さ1.5mの溝である。下層から、18世紀中頃～19世紀前半の陶磁器などが出土している。

土坑

S K 6 (第3図)

西側敷地南側で検出した長辺0.9m、短辺0.7mの隅丸方形の土坑である。深さは、0.3mを測る。断面形状は方形をなす。遺物の出土はない。

S K 10 (第3図)

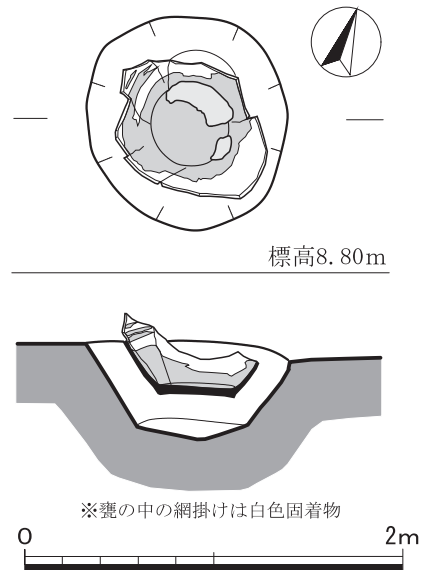
西側敷地で検出した直径0.6mの円形の土坑である。深さは、0.3mを測る。断面形状は盆型をなす。19世紀前半の陶磁器を含む。

S K 12 (第3図)

西側敷地で検出した直径0.6mの円形の土坑である。深さは、0.3mを測る。断面形状は盆型をなす。遺物の出土はない。

S K 13 (第3図)

西側敷地で検出した直径0.7mの円形の土坑である。深さは、0.4mを測る。断面形状は盆型をなす。広東碗など18世紀後半～19世紀前半の遺物を含む。



第5図 S X 11実測図 (1/20)



第6図 S X 11出土遺物写真

その他の遺構

S X 7 (第3図)

西側敷地南側で検出した長辺2.5m、短辺2.4mの方形のタタキである。厚さは3cm程度である。西側半分は、東側半分に重なるように後から貼られている。西側半分は漆喰製、東側半分は砂漆喰製である。南西側は一部漆喰に1cm大の砂利を混入している。南東部に向かって傾斜しており、S D 4に使用した水が流れ込むように造られている。このタタキの上面にカマドが乗っている。

S X 8 (第3図)

西側敷地で検出した長軸6.4m以上、短軸5.4mの円形のカマドである。煉瓦や石を漆喰で固めている。明治以降の所産と考えられる。

S X 11 (第3図)

西側敷地で検出した直径0.5m、深さ0.3mの円形の土坑に陶器の甕を据えた埋甕である。甕の内面には白色物質が固着している。

2. 出土遺物

19世紀代の陶磁器などパンコンテナー1箱分の遺物が出土した。詳細は第1表遺物観察表を参照願う。



第8図 SX1・SX2 検出状況（北東から）



第9図 SX1・SX2 北西コーナー（北西から）



第10図 SX8 検出状況（北西から）



第11図 SX7 検出状況（北西から）

Ⅲ. 調査の記録



第12図 SX1・SX2西壁（北西から）



第13図 SX3検出状況（北から）



第14図 SX3断面（北から）



第15図 SX2断ち割り状況（北東から）



第16図 SX2断面（北から）



第17図 SX11検出状況（西から）



第18図 SX1・SX2検出状況（北東から）



第19図 SX1・SX2・SX3検出状況（北から）



第20図 調査区近景（北から）



第21図 調査区近景（北から）

Ⅲ. 調査の記録



第22図 出土遺物写真 1



第23図 出土遺物写真 2

Ⅲ. 調査の記録

第1表 久留米城下町遺跡第24次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			染付 釉薬	装 飾 ・ 調 整			底面・高台 内印銘等	胎 土	備 考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み				
1 第22図	SD 4 下層	磁器	鉢	—	6.2	(2.2)	染付	—	幾何	宝尽くし	—	白色精良	型打ち成形 金彩	201407 -000015
2 第22図	SD 4 下層	磁器	火鉢	—	—	(8.7)	染付	不明	無釉	—	—	白色精良		201407 -000017
3 第22図	SD 5 上層	磁器	碗	—	—	(3.9)	染付	水仙	—	—	—	白色精良		201407 -000018
4 第22図	SD 5 上層	磁器	筒型碗	—	—	(2.2)	染付	渦	線	—	—	精良 (黒色粒子)		201407 -000019
5 第22図	SD 5 上層	磁器	碗	—	—	(3.2)	色絵	花	唐草? (墨弾き)	—	—	白色精良	金彩	201407 -000020
6 第22図	SD 5 上層	陶器	碗	[10.0]	—	(4.4)	灰釉	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ					201407 -000021
7 第22図	SD 5 上層	ガラス	簪	(6.9)	0.5	0.5		らせん				色調：オリープ		201407 -000040
8 第22図	SD 5 下層	磁器	筒型碗	[10.0]	[2.8]	6.4	染付	竹	四方樺	—	—	灰色精良		201407 -000024
9 第22図	SD 5 下層	磁器	碗	—	4.2	5.2	染付	花唐草	—	—	渦福	灰色精良		201407 -000022
10 第22図	SD 5 下層	磁器	碗	10.2	[4.0]	4.7	染付	網・窓枠 松竹梅	—	—	—	白色精良		201407 -000023
11 第22図	SD 5 下層	磁器	碗	—	—	(4.2)	色絵 染付	椿	椿	—	—	白色精良	金彩	201407 -000025
12 第22図	SD 5 下層	陶器	碗	—	5.0	(6.0)	灰釉	ヘラケズリ ヨコナデ	ナデ	—	高台豊付釉 剥ぎ	精良		201407 -000029
13 第22図	SD 5 下層	陶器	碗	—	3.9～ 4.0	(3.2)	灰釉	ヘラケズリ ヨコナデ	ナデ	—	高台無釉	精良		201407 -000028
14 第22図	SD 5 下層	陶器	皿	18.0	6.8	4.6～ 4.8	鉄釉	ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	—	基筒底	灰色精良	高台内釉掻き取り	201407 -000026
15 第22図	SD 5 下層	陶器	甕	—	—	(19.5)	鉄釉	ヘラケズリ 灰釉 (上掛)	タタキ ヨコナデ	—	—	精良		201407 -000027
16 第22図	SD 5 下層	メノウ?	火打石	4.5	3.0	2.0							重：24.8 g	201407 -000031
17 第22図	SD 5 下層	石英	火打石	5.0	3.8	2.2							重：46.4 g	201407 -000030
18 第22図	SK 10	磁器	碗	—	—	(1.7)	染付	不明	線	—	—	白色精良		201407 -000032
19 第23図	SK 10	陶器	トチン	5.5	5.5	(3.3)	褐釉	ヨコナデ	—	—	—	灰色精良		201407 -000033
20 第22図	SK 13	磁器	水滴	—	(3.5)	(5.5)	白磁	七宝 (陽刻)	ナデ	—	布目	白色精良	型押し成形	201407 -000035
21 第22図	SK 13	磁器	皿	—	—	(2.0)	染付	—	花?	—	高台豊付釉 剥ぎ		ハマ痕あり	201407 -000034
22 第23図	SK 13	陶器	蓋	6.5	—	1.9		つる草	ナデ	—	—	精良		201407 -000036
23 第23図	SX 2	磁器	筒型碗	—	—	(6.0)	染付	松	—	—	—	白色精良	18c	201407 -000006
24 第23図	SX 2	磁器	碗	—	—	(5.0)	染付	不明	—	—	—	白色精良	18c 後	201407 -000001
25 第23図	SX 2	磁器	碗	—	5.1	(3.5)	青磁 染付	—	二重線	五弁花	高台豊付釉 剥ぎ	精良 (黒色粒子)	コンニャク印判	201407 -000002
26 第23図	SX 2	磁器	小坏	[4.6]	[2.4]	3.3	白磁	ヘラケズリ ヨコナデ	ナデ	—	—	白色精良		201407 -000003
27 第23図	SX 2	磁器	紅皿	[4.6]	[1.4]	1.3	白磁	貝殻	ナデ	—	—	白色精良	型押し成形	201407 -000005
28 第23図	SX 2	磁器	瓶	(4.2)	—	—	染付	不明	ナデ	—	—	白色精良	型押し成形	201407 -000004
29 第23図	SX 2	磁器	碗	—	5.8	(3.0)	染付	線	—	丸	福?	白色精良		201407 -000008
30 第23図	SX 2	磁器	小坏	—	2.9～ 3.0	4.4	染付	唐草	—	—	—	灰白精良		201407 -000010
31 第23図	SX 2	磁器	皿	—	—	(2.0)	染付	—	花	—	—	灰白精良		201407 -000009
32 第23図	SX 2	磁器	鉢	—	—	(4.2)	染付	格子	格子	—	—	白色精良	口縁端部金彩	201407 -000007
33 第23図	SX 2	陶器	灯明皿	8.1	4.4～ 4.5	3.6	褐釉	ヨコナデ	ヨコナデ		糸切り	微砂粒		201407 -000011
34 第23図	SX 2	磁器	皿	9.3	5.2～ 5.3	2.3～ 2.4	染付	口紅・輪花	山水樓閣	—	高台豊付釉 剥ぎ	精良 にぶい黄橙	型打ち成形 二次焼成	201407 -000039
35 第23図	SX 3	磁器	皿	—	—	(3.3)	青磁 染付	唐草	不明	—	—	白色精良	型打ち成形	201407 -000013
36 第23図	SX 3	磁器	皿	—	—	(1.3)	染付	ろうびき	不明	—	—	白色精良		201407 -000014
37 第23図	SX 14	磁器	鉢	[12.8]	7.2	5.3	染付	△×・山水	みじん唐草	牡丹	蛇の目凹形 高台	精良 (黒色粒子)	18c 後～19c 前	201407 -000037
38 第23図	西区下層	磁器	皿	9.0	5.1	1.9～ 2.0	染付	唐草	花唐草	—	大明年製	白色精良	施釉がまだら	201407 -000038
39 第6図	SX 11	陶器	甕	—	23.7	(24.1)	褐釉	ヨコナデ	ヨコナデ	白色沈殿物 付着	—	精良		201407 -000041

IV. 総 括

今回の調査では、三つの屋敷地が確認された。西側屋敷地は地表から0.4mで明治から昭和期の生活面を検出し、土坑、タタキ、カマド、土止めの石垣S X 3、溝S D 4などを検出した。店舗または住居の裏手の台所とみられる。溝S D 4は中位を漆喰で補強している。補強の下位からも明治期の遺物が出土していることから、生活面の年代もそれを遡らない。中央屋敷地では、コの字型の石垣を検出した。調査区外の南側にもう一辺があるとみられ、口の字型になると思われる。西辺のみ二段積み増しされており（S X 1）、下段（S X 2）の遺構が廃絶された後に土止めとして積まれたものと考えられる。石垣S X 2は11段と基礎が深く、最下段の下には松とみられる桐木が石垣に沿った方向で3本並べて敷かれている。松とみられる桐木の下は、砂質の自然堆積層であり、この層が当地一帯の本来の河川堆積層上面と考えられる。石垣S X 2の上面近くまで盛り土をして生活面を構成していると考えられ、S X 2はその形状から土蔵の基礎と判断できる。S X 2の年代は、裏込めから出土している土器から、19世紀前半が築造年代と考えられる。かなり堅固なつくりの基礎であり、当地一帯の軟弱地盤に対応するためと考えられ、漆喰塗、瓦葺きの立派な土蔵であったことが想像できる。

東側屋敷地はコンクリート基礎等の攪乱がひどく、近世の遺構は確認できなかった。

報告書抄録

ふりがな	く る め じ ょ う か ま ち い せ き ー だ い 24 じ は っ く つ ち ょ う さ ほ う こ く ー							
書名	久留米城下町遺跡 ー 第24次発掘調査報告ー							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 354 集							
編著者名	江頭 俊介（編）、古賀 和子							
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15- 3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9715 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	平成27 (2015) 年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
く る め じ ょ う か ま ち い せ き 久留米城下町遺跡 だ い 24 じ ち ょ う さ 第 24 次 調 査	く る め し 久留米市 ち ゅ う ま ち ほ か 中央町32-4 外	40203	—	33° 19′ 07″	130° 30′ 28″	20140701 ゝ 20140812	84㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
久留米城下町遺跡 第 24 次 調 査	集落	近世	石垣 溝 土坑 カマド 埋甕 タタキ	4 列 2 条 4 基 1 基 1 基 1 貼	近世陶磁器、ガラス、 火打石		土蔵の基礎と考えられる 18世紀以降の石垣を検出 した。	
要 約								
調査地は、久留米城外郭の南面に広がる町屋地区の一つである呉服町にあたる。検出遺構は18世紀以降の土蔵の基礎と考えられる石垣のほか、19世紀から戦前までの石垣・タタキ・埋甕等がある。土蔵の基礎と推定される石垣は規模も大きく、城下でも栄えたこの地域ならではの遺構である。								
土木工事の届出日		平成26年 6 月13日 (26文財第345号)			遺物の発見通知日		平成26年 8 月18日 (26文財第612号)	

久留米城下町遺跡

— 第24次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第354集

平成27年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 香和印刷株式会社